

東邦大学学術リポジトリ



OPAC

東邦大学メディアセンター

タイトル	改革と伝統の狭間
別タイトル	A gap between reformation and tradition
作成者（著者）	富田, 剛司
公開者	東邦大学医学会
発行日	2018.09.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 65(3). p.151 151.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	論評
著者版フラグ	publisher
JaLCOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2018 003
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD40010662

改革と伝統の狭間

「発展をしていくには改革が必要だ」というお決まりのフレーズがある。一方で、「伝統は守らなければならない」という言葉もよく耳にする。この二つのフレーズを合わせると、「発展をしていくためには、伝統は守りかつ改革をしていくことが重要だ」となる。まことにごもっともであるが、当然ながらここには矛盾がある。改革を行うということは伝統を革めるということであるし、伝統を守れば改革は行えない。そこで例えば次のような言い換えもできる。すなわち、「発展をしていくには、良き伝統は守りつつ、悪しき伝統は改革すべし」、である。もし、“伝統”を“ある組織の現体制”と言い換えた場合、さらに次のように言えるかもしれない。すなわち、「発展をしていくためには、現体制の良いところは守りつつ、悪い部分は改革していくべし」。これはもう、上は某国の政治体制から、下はしがない我が医局まで、組織と名のつくところに対してすべてに当てはまる内容であり、自分で書いてみて自分で感心しているところである。ただ、突っ込み所も多い。突っ込みその1：“発展”というのは何？ その2：現体制の良い所、悪いところは、誰がどうやって決めるの？ その3：発展したかどうかどうやって確認するの？、等々。そもそも組織というのは発展が必要なのか。最近よく聞く言葉に「普通がいい」というのがある。でもこれは詭弁かもしれないが、“発展”を“普通”に置き換えてもまったく同じフレーズで納得できる内容になる。要は、ある体制を維持するのに欠かせないのは、現状を維持しつつ不都合になった部分は改革していくということである。

今年には明治維新 150 年とのことである。1868 年に明治元年となったかららしいが、高校時代に日本史を習った身には、1867 年の大政奉還（慶応 3 年）を起点とする方がなんとなくしっくりする。ウィキペディアによれば、明治維新とは、“明治時代初期の日本が行った大々的な一連の維新をいう。江戸幕府に対する倒幕運動から明治政府による天皇親政体制への転換と、それに伴う一連の改革を指す”。とのことである。改革である。これなどは、「日本」という体制が、その不都合になった部分を大々的に改革し、その組織を維持するために行ったものとも解釈できる。すなわち、明治維新は革命とも思われる大改革ではあったに違いないが、突き詰めれば「日本」という体制（天皇制）を維持する一環として行われたものであり、「発展するためには改革が必要だ」の言葉にすっぽりあてはまる事象である。万が一、この改革の結果、“共和国”が設立されていた場合は、体制そのものの変更であり、これは革命と呼ぶべきものであろう（徳川幕府側からすれば革命そのものであったろうが）。とすれば、日本人は、もの凄く改革が上手い人種なのではないだろうか。そして、体制を維持する能力が高い。このように考えると、なんだかんだと言っても何とかなっけて行きそうな気がするから不思議である。今、世界中がひっくり返りそうな雰囲気の中、知恵を振り絞って、何とか普通に生きて行きたいと思う今日この頃である。

（東邦大学医学部眼科学講座（大橋）教授：富田剛司）

DOI : 10.14994/tohoigaku.2018-003